

ライフデザイン学への思い

人間環境デザイン学科 米田 郁夫

昆虫は5億年以上も前から脊椎動物の系統から分かれ今日まで生き延び繁栄している。人類の祖先がチンパンジー、ボノボ（ピグミーチンパンジー）の系統から猿人へと分かれたのは600～700万年前であり、われわれの祖先である新人（ホモ・サピエンス）が誕生したのは10万年前とされている。地球が誕生したのが46億年前ということ考えるとほんの最近のことである。人類はいわば新参者である。

自然環境に対する耐力が優れているとはいえない新参者の人類が生き延び、今日の繁栄を築くことができたのは、猿人（アウストラロピテクス）からホモ・エレクトス（直立するヒト＝二足歩行するヒト）になって、脳が発達し、前肢（前足）が上肢（手）となり、さらにホモ・サピエンス（考えるヒト）になれたからである。器用な手と知力によって、人間は厳しい自然環境で生きる術を身につけ、さらには、自然環境を作り変えてしまう術まで獲得した。最早、人間は、ただ単に生理的、本能的に生きているのではなく、理性的にそして知的に生きているということである。「人間らしい生き方」を営んでいるのである。「人間らしい生き方」、それが「ライフ」といってもよいであろう。

ところで、われわれは一人で「人間らしく」生きていくことは決してできない。人間は、家族、社会を形成し、その中で生きているのである。人間以外にも「社会」を形成している生物種はいる。しかし、言うまでもなく、人間の「社会」は他の生物種の社会より遥かに複雑で高度である。

われわれの「ライフ」の質（QOL）は、「社会」の「環境」が良好であって初めて維持される。「環境」とは、衣服、靴、道具、機械、建物、設備、施設、都市、法律、制度、情報、他の人との関係……等々、自分以外の外部要因すべてが含まれる。「自分」も他の人から見れば「環境」である。

「ライフ」を営むうえで不可欠な「環境」は、ほとんどすべて人間が作ったものである。つまり人工環境である。「環境」は、人間の知的能力が進化し、高度になるとともに、多様性が増し複雑になってきた。「環境」が適正であれば、われわれの「人間らしい生き方」の選択肢が豊富になり、システムとしての「社会」が上手く回るであろう。

しかし一方、複雑化した社会システムは脆弱さも併せ持っている。高度で複雑な機械システムが、安全に正しく動くためには、各構成要素の不断の点検と保守が必要不可欠であるのと同様、多様化し複雑化した「社会」「環境」も、やはり、いろいろな要素を常に点検し、あるときはデザインを修正し、またあるときは新しいデザインを導入することが必要になる。その原動力となるのは、やはり人間の知力である。したがって、知を共有するための学問は人間にとって非常に大切なものである。

「ライフデザイン学」は人間が日々営む「ライフ」の質を向上させることを追求する学問である。ライフデザイン学部は、人間の健康生活の維持・向上のためのデザイン、乳幼児の健全な成長を育むためのデザイン、高齢者や障がいのある人たちの生活を支援するためのデザイン、いろいろな人たちが共生できるための街や施設や道具のデザインについては、とりわけ重きをおいて追求している。「ライフ」は非常に多様であるので、ライフデザイン学も、ご多分に漏れず、いろいろな専門分野に分か

れている。

ライフデザイン学部では、各教員がそれぞれの専門分野の研究・教育を深化させることに傾注している。と同時に、「ライフ」の質の向上のために、他の専門分野と連携した学際的な研究も積極的に進めている。その実践例の一つがライフデザイン学部プロジェクト研究である。プロジェクト研究では、ライフデザイン学部の全教員が研究費の一部を供出し、それを原資に、いろいろな専門分野の教員が参画する学部・学科横断的な研究が遂行され、これまでに数々の成果が上がっている。

今年度も、研究論文、研究ノート、プロジェクト研究報告、海外特別研究報告が掲載された「ライフデザイン学研究 7」を発刊することができた。創刊されて7号目を数えるに過ぎず、まだライフデザイン学は緒についたばかりである。だれもがそれぞれのライフステージにおいて豊かな「ライフ」を送ることができる社会を構築し維持するするためには、ライフデザイン学の果たす役割は大きい。ライフデザイン学が、開かれた学問として発展し深化することを期待して止まない。そのために、いろいろな人たちからの助言、批判、刺激を賜ることも大変重要である。そのために「ライフデザイン学研究」を発刊しているということを肝に銘じたい。